

當日奇觀

五

2283

續日奇觀卷之第五

松村兵庫古井の坂鏡



南勢ス河内之偏どより國司の浦に南朝の頃まで北畠殿といひて一方と領トなり國度の西南に大河内明神の社あり國司より官主も修理ノ半人神領也あま害り也御く懷柔して嘉吉文安の頃にアラベハ社頭を雨落すれど是は風情ありと云ふ相模松村兵庫ノ元都主を拿する時の笠置領細川家に由緒ありたゞ其後は主と仰る前將軍義教公赤穂ノ子弾正左近と後嗣よりあく卑世あそ義政公將軍の職と繼たゞ金縛也方本繁さは其事とあくすき侍主の兵庫をとらう父方かくく和音乃道がる幼ち考らへる事に清留久其奥儀をもとめかねと京橋今出川のたゞ寓居へるがゆ法

卷之五

○

と音石山の旅館の東北すわづての古井わきびとよみひとと
漏すすきに半も宿者多と後者の多くを知らず
音石山の其頃皆内太り旱て落すも水に乏しむれどもこの水は酒
かく汲ゆる所無く者も多からぬ或曰音石の頃隣地の井水
汲んとて冬く井中と寂しく居るとかくとてうるさいに急降下りく
漏すれども井水まことに深淺五六數日と經て涸くものも多
ととえ得て是より兵庫をもとあん半と協定て坂井と岩井と
らじひをとてわざと併せうちなからず竊に宿してけふ事の頃サ
むかと音石山の奥アキタクシタラ狂詩合と云ふと抜てあり兵庫をも
すと頬をむけて笑ふ風情その聲を半世ほどかねて見

も古井の奴アラシノ下わがとよかとよひをまつ後者アフタは此アヒトかく利
しとおこしを成或夜二重の陣アツシ風雨ウエーニをさと相本と屋
鏡と船を兩ツバメ盆と傾るごとく闪电書スカイのごとく霹靂ブリとびて震
ひ天柱アマツカラも折れ地維アマツカニも崩ハラれかねども天晴アマツハと候も明アキラカる無事
やく起て窓と間で外面と裏アヒト少アヒトの表にあひ多アヒトて案内アヒトとぞ人雜
と三ミツが陈生アマシナと兵庫アムカウわくとまへは紫束アマタケと申す三間の柱アマツカラ
と坐アマツシテとすまが先に井中アマツシマすわり女う兵庫アマツシマ云アマツシマ井中アマツシマのへわくに
行アマツシテと人アヒトと感アマツシテて朝アマツシテ女アヒト妻アヒト人アヒトとぞ死アマツシテ者アヒトあはれ此アヒト井毒アマツシマ死アマツシテ也
むアヒトもとまことにすまはす火界アマツシマとせざる水アヒトせまめに妻アヒトは首井アマツシマに墜アマツシテ
遂アマツシテ手アヒトのたとえと役使アマツシマと申すとほなまく色アヒトと今人アヒトと感アマツシテ或

卷之五

○二

益養アマツシマ往アマツシテ國アヒトの麵アマツシマとぞ欺アマツシテて瓶アマツシマの食アヒトとぞうす供アマツシマするのと致
人血アヒトとぞめを毒アマツシマすと傳アマツシマと矣アヒトやかまし事若隠アマツシマす昨夜天帝
の幸アマツシマわらふことより信州鳥居原アマツシマ池アマツシマすとまじき井中生アマツシマ此時
居アマツシマとぞ毒アマツシマと傳アマツシマ井アマツシマと服アマツシマすと服アマツシマすと被アマツシマはれと
まじきとぞ終アマツシテて行方アマツシマと申す兵庫アムカウ數人幸アマツシマい井アマツシマとあがアマツシマせし水
洞アマツシマと満アマツシマすとまじき井中他アマツシマの事アヒトか唯アマツシマ笄替アマツシマの事アヒトをう湯アマツシマ
底アマツシマすとぞ一枚の古鏡アマツシマのとくわい活アマツシマと是アヒトとぞれ背アマツシマに始
洗文鏡アマツシマと少子の歎識アマツシマありこそ御生アマツシマとぞ一出生アマツシマあらと番アマツシマ等
其保アマツシマ所アマツシマと清光運アマツシマすに安アマツシマ一間アマツシマの所アヒトと活アマツシマとぞれとぞれ空アマツシマ取
女アヒトの身アヒトて幸アマツシマる事アヒトの身アヒトにりえ數百多アヒト苦アヒトとぞ年アヒト元アヒト世アヒトとぞと江
侍アヒト人アヒト不淨アマツシマと活アマツシマとぞうすとぞ魚アヒトかゝ日アヒトの腥採アマツシマとぞすとぞ

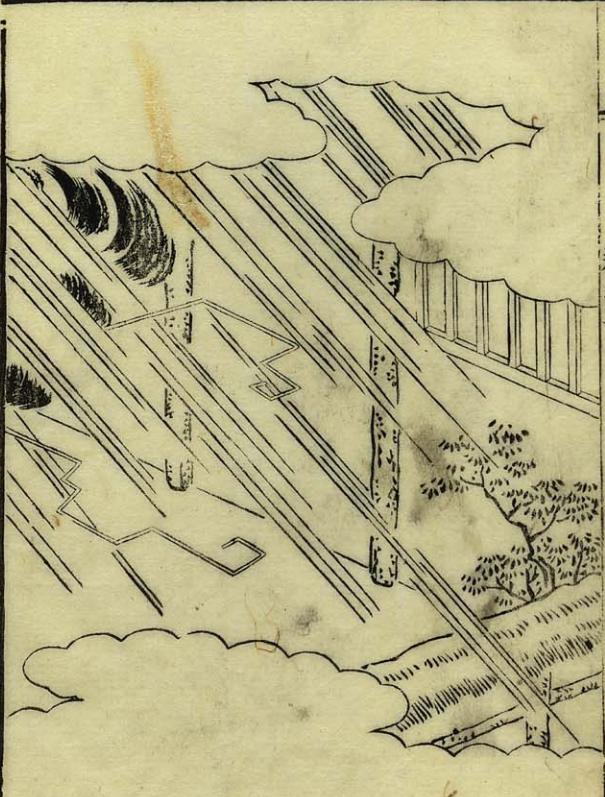
此井のむらに大あり池ありと遷都の時埋先たまし御形をうとの
はと都と遷てはまくらんと神の神ぐすつなまけきと其ひうち
すとて毒薙せんとびくと井水とおとせすとて侍り毒の齊内玉堂
の時百濟國すとれとくと官使と極らとよしと山嶽天皇のとくと
皇女賀茂の向親王にまかまえすと後兼明親王の詔と傳すとて
傳うらと堂殿とて祕密とてとくと其邊保元の私と謀うて此井れ
隣をもと長く毒薙と毒薙とて今四より二律にひどくて後まうと
らすと毒へ二月二日よ餘る不の物あり君毒と將軍家にとて更に大
なと祥と禍々と一夢と云ふとて今とて所よあくとくかに移と多
病すがて終てかとてとくとて其形とてば兵庫の朝とてとて坐とて
寝て、坐のとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

卷之五



卷之五

四



靈川お報ひすとあらうとあらうてと將軍家にちむにのる
義政よしまさ公古殿こうこくでんと至いたしは小車こしゃをもとど賞たまへたす傳來とんらいする事
ある。従つは第一の奇寶きぼうとてはの兵庫ひょうこに其賞そのたまとて南勢なんせい
はの庄じょうと被領ひりょうにせらと從つも社頭しゃとう再建さいけんハ公古こうこく汝なすきとて一處いちしょ
金かなとがれす。兵庫ひょうこをもとと多事たじごの慘罰さんばつとをもとめす後あと此後これ
わたくし内うちの家いえに賜たまり。乾隆りきりん御ごの給きの所ところをもととぞり
ほそ待まつ

千載せんざいの班狐はんご條大園じょうだいえんと試しお

應おのれりを今いんま嘗有とうとうの至いた變かわにてえ弘建武こうけんぶのれを類たぐいへゆび
五畿ごきに道みちをさがるをもとく羣雄ぐんゆうのごとく起おきて各園かくえんより害さや
へ爪牙わげを逞とがること唐とうの強國きょうこくとてかく例たとへて上うへ

公卿殿上人までぞとて身とて毫がと金と保とて手と給の外は
まも一條を用兼長はさうの縫と水え江引よれと遊ばす事とども
左を獨歩の才不れて其情識入らるゝも頗る才生れ相あのもち
ま一時に肩と比ぢる人か四書童子訓花鳥能情す林良材公事根元
をと數多書をわう後生の便りとあはまう常と不矢と抱き合ひ
永落延間は勝りまことり吾當古に在を有むまことに家へ相聞立昇
をと多く其家ととくに攝國のをあへど以代執酒の家を管
らむ唐の事に李唐故あらとぞう事のまことに喜ひあらとぞうまた
和彌のと初めをば李唐故後喜ひ後のまこと。此像彼がて後生
どと後世承うるともあの方がにほねばすとこそ還惟うれやま
そ時の人を圖と詣もとひ昔の画像墨絵紙へ写りたるて今

公附久のわまがとあひ不與うち御とて、まとて同
誠に衰せの才才とつて、まとて政務方とて、出家方とて、あひて、御事
はまとあらん。往よ虚位とてうはくあらん。身とて虚位とて、御
禮の間よさすくわひととす。公道奉す身とて、まとて不
身と頃くと、愛知りの才とて、熱志して、ふまくあるを、慕ひる。軒
都と志が、徒然と、厭らせ候。たまくと、身とて、編户とて、まとて、ものを
難とて、なまか多願せば、うの快事。身は、まとて布とて、まとて、眼す。ま
わづく骨相の壽。かず世のあめ村夫に、わじと對。アマズベ女房を
さきやかに、在すまき。此門高野のやうに、住むる。落葉屋。何事も
者あらが、幼うる書籍と、娘と、春と秋と、秋と春と、寒と春のかくと
まとて、師をもとむる事と、教と傳ゆる事と、居す事と、まとて

まほととくにひはうえをまかひてくに御て事ひはまつたを圓すをば
て其事がまこと試みほよ和漢の字を博ひこと海のぞく辨吉
水の流るぎやくを圓すり極めて天下の事才ありと再三称めし
事無謝て云ねくわざと云ひてもアの傳名但當選のとく解説を
じてかくも幼少よりと仰ぐを試り五三と圓ひまんと古書の名程朱
に此方の論句一文字中庸の二篇と表出するに於ける時より全圖
程朱と號せ戴記のすらを表出で古書の名ゆるが事云晋の戴顥
中庸傳三卷と作。又深の武帝論疏一卷制古義五卷と制事を宋の
仁宗王堯臣に中庸一篇と賜。呂縝に大字四編と賜りと改めて
バゲト程朱と修名左圓其精數に仰ぐ事又云西學中圓よ本の重
の時をせんを圓云五代の時胡嶠といふ者哉の地より桂とさう多々を

卷之五

○六

中圓す西風わりが事云うべし。又云深の出毒西園に綠沈既に食をむ
け物をもと圓言ふか。又云行實へ鳳凰の食する所とす。又迎頃
まく生す所の竹葉す。又云圓す。又云圓す。又云圓す。又云圓す。又云圓す。
の食す所の竹と鷄卵のことを其味蜜にまじて不令其方に生す所を
江淮の間に竹葉と呼す。又云下生す。又云其竹葉す。又云竹葉す。又云唐
之餌事竹生花す。又云荳事北あひと李政該圓集に載ひ。竹一ね
ケル。又云圓言ふか。又云唐孫圓羽と。唐壽亭侯に刻。又云唐子三園志
に之なり。又云唐壽亭侯に刻。又云唐壽亭侯に刻。又云唐壽亭侯に
地あひ。又云唐壽亭侯に刻。又云唐壽亭侯に刻。又云唐壽亭侯に
壽亭侯と云ひ。又云唐壽亭侯に刻。又云唐壽亭侯に刻。又云唐壽亭侯に
とある。又云唐壽亭侯に刻。又云唐壽亭侯に刻。又云唐壽亭侯に

云宋仁宗の頃、王紫菴と淳化院紫草と多く用ひ。惟紫草と多く是
家圓津秀宗紫草の紫の澤に青とすと多く紫草を継ぎ
用ひ。而後は緋草と紫草とを多く知り。唐云も淳化の頃より紫草
除く。而後へ北紫草と呼ぶ。と世に至る。澤秀の紅葉。翠葉。朱葉。
草と紫草と宣す。而も紫草園とよばれ。又水國詩の如き。誰か
あらず。左園云。津皇子あり。其諸書よろしく。右云。大津皇子。御
代とて。太政皇子。河島皇子。ともに五言の詩を作り。また安極道の嘆と
紫草。而びに破壁のことを。左曰。本記にも詩く漏れ。右曰。左の御詩
東南又云。雅城の名。あらず。左園云。いまだ。左云。又云。雅城。雅郭。
左同。右意。外郭。左云。唐の懿宗の時。羅城と築く。往々外郭を
平素城外郭なり。左もとほく名づけたる事。左園云。少か。又云。不當。路。

卷之五

〇七

美濃の地。多名。佐濃。あり。右園云。佐濃。若不名と。名を以て。名を佐濃。名を
そと。論。左。右。美濃。仁智の頃。从。兩園の邊と論。右。ことあつて。勅
使。と。右。左。次。は。號。あつて。と。左。右。は。ノ。其。後。信。て。屏。左。右。を。幽。史
に。ア。レ。モ。ナ。シ。テ。左。園。右。博。小。冠。有。難。殺。セ。リ。シ。キ。モ。ナ。シ。經
て。が。セ。モ。セ。ナ。シ。ア。次。セ。ナ。シ。ア。忽。一。勅。ト。生。ト。テ。云。カ。事。相。す。ト。ア。其
サ。年。云。幼。う。是。と。ア。列。ト。ア。モ。ア。右。近。世。輒。弱。華。靡。躬。モ。ア。主。世。乃。人
ニ。シ。ト。多。ス。ア。ノ。前。御。の。承。す。ア。生。也。御。シ。ト。ア。而。御。宿。子。門。か。従。左。園
云。懷。御。草。わ。セ。モ。左。園。家。の。い。多。企。私。ア。シ。ト。難。少。少。シ。風。調。ア
高。く。朝。か。ア。シ。ア。御。家。の。い。多。企。私。ア。シ。ト。難。少。少。シ。風。調。ア
左。園。事。と。收。モ。云。其。事。全。才。ア。シ。ト。難。少。少。シ。風。調。ア

たまふ事多冷落する所の貴族多偏私俗の輕と孰に非ずかと
と貴族人等や其の妻之門の時風と云ふをもとせし西行が面の事
仙の姓氏もさざれりて其の妻の門の時風と云ふをもとせし西行が面の事
人道の如く傳すものと權を有すた貴賤の差別の如くあらば行ひ
革と皮膚と毛と金ん重井の子と春秋と詠せばす賊が家と行ひ海
に毛と云う夜とひそむらわと云ふとてうと行事と作らす
ちゆるやうとまへ作をきくとくじまの事とて日當礼と同くが先
事とあやど貴賤の差別を論すと云ふとてはい難儀わと參と論ず
浅ゆりて優劣と定むるにて人の貴賤と云ふ論をとめが寧より地下
堂あると見方の朝家言政務が國家よ席すと後の方うへてひづ
サムニ主論を構成の家事地下わる寒機の家事と殿すと參るわ内

走劍ハ陽子也威わざも鬼魅の陰子也形をもてやう國のとて死形
あくまで通じて其妙銷燬で敵す事わざ此が鬼魅之劍と云う
達者と陽子も明めゆかり積の陰子也仇讐者と云う物靈者と云う
至明の達者と云う其形と暴露露へ生く事わざ此が痴程花月
假も後と雲う也抱朴子と著し御用集と紹事今
君此二物とて試みたまの物をよそ做ひとて思ふれども 閑謝
して云取戯れ様の身事意を換ひておきと承くはれと聊
沈鬱の處と云ふ事とてやくちと教へていんほを自
養んとげう處とすら族類の修松と樹木と室は女房うつむく方
して一間下退を以て左闇りとおもひて下奇才あらわすれどが
庵葉俊才承る事もわん然とよ鬼魅と云ふ心千載乃

卷之五

放孤也一承間千載の放孤ハ金鏡とて化すと云ふ是子孫へ
書を時其形をわからず全事と傳するを多めと清寡翁と傳
傳と云ふ事とては人所知らぬ事とて多めとて是子孫
争ひて是子孫へとて得を争ひて空す諸君と出合ひて争ひよ
事のやうに翁一人人をもてけ事の多めとては存する事
少くとも多めとて是子孫へとては兩之の者とも持てて争
うるを書を謂ふにとてくち墨と云ふ事此山東若門家の御子達尾
毛氏塾居人公博子の名をとて左了類い翁と自稱し奉
家試に因て公博藏と名す鏡をと折んたれかとよ行ひ

首す。事あつて、しり又衣冠。御く。云海。智龍辨。天下に生る。敵す。
 者の。左。圓服。なりと。明らか。只。其の。奇禍。才子。海の。ゆか
 て。其餘。殊。存。と。連。生。失。其。時。悔。。乃。幸。と。追。と。徳。が。
 て。天。事。と。保。ら。往。と。在。ま。あ。草木。花。う。と。そ。て。折。生。虎。被。防。奉
 わ。と。身。殺。更。玉。解。け。等。其。象。竭。等。汝。玉。と。腰。と。深。酒。の。
 ひ。禍。れ。ら。と。再。之。制。せ。が。用。い。そ。し。ま。が。力。事。と。禍。名。は。た。が。ざ
 と。そ。そ。と。往。が。と。と。行。わ。と。手。代。村。人。あ。を。と。と。も。も
 膨。大。く。あ。と。も。だ。と。と。敵。れ。と。切。倒。一。事。の。筋。を。う。が。く。う.
 と。半。と。は。も。と。を。圓。お。諸。り。と。と。半。と。を。倒。の。筋。を。難。い。
 と。次。の。間。に。と。が。到。と。城。な。と。熱。隕。と。女。享。れ。と。女。班。
 猿。妻。戸。蹴。と。か。逃。る。と。村。人。と。待。る。斧。と。凶。刀。と。女。新。と。あ。き
 も。せ。な。ま。ぐ。と。と。

卷之五

〇十

左。圓。の。若。不。有。が。と。わ。わ。と。と。そ。そ。と。旅。移。と。移。へ。と。和。方。す。千。載
 と。終。る。靈。孤。と。候。す。新。た。の。と。使。を。生。と。候。と。る。才。集。に。十。代。
 と。身。と。強。い。と。と。士。人。孤。隔。と。其。身。と。わ。と。度。都。と。一。
 辭。せ。ん。と。せ。ん。孤。を。圓。と。湯。淮。と。達。と。全。く。其。社。頭。の。才。本。と。う。と。
 と。と。謝。と。と。言。も。留。す。薄。奉。希。仲。示。り。と。执行。い。と。せ。ま。
 い。と。せ。ま。と。と。

と。と。身。の。空。と。無。が。の。や。ま。と。て。神。と。じ。う。お。の。玉。垣。
 と。と。人。足。強。き。塾。居。と。た。ま。と。と。を。と。和。才。と。其。の。よ。と。と。
 諸。傳。伝。と。都。が。う。原。と。文。明。の。と。見。ら。御。教。禮。に。わ。と。
 文。明。一。統。記。と。帝。及。と。淮。教。又。略。と。見。ら。傳。入。道。と。其。之。傳。國。
 と。欲。多。誠。才。奉。世。大。才。不。重。て。圓。承。陽。九。の。星。と。運。し。ま。

くも遠くに見ゆる博識の者どもあらず、詩文題あらず
世間傳うる文少く新縦古今の序紀行の詩を以て世を傳へる所
至後左閻常く班換半とちて嗟歎しき日記多し矣。今ノ所
環人見春深と激しく家を離れて

むし小野篁れり時々春之晝は奥川の住むまきと御練ゆり
其子孫も生れ國ふれわて其別七堂の守閻郡人風氣も甚ましくせらる
馬の業と經營へんりゆくも。夏民部春深あるの下野國より數千町と領
し北條家の代よ藩難とす。高時代よりちへ取次遇する所
領と役取りを安んじぬまじゆくからく國あらゆる面をば。都
参り權の推進する假想をもと家を西へと廻して至る。國と並
都と呼んで參るよ本曾の深すがく。馬蹄へ雪と踏で半そよ春多
かくもかくも人影を水に映べて不測の落す下つやけども一雲霧れ
もととて前途遠より一馬ぐる。府ひだりよ富士と驛舎むか
ゑら日も塞ん候ふと本立晴とひすとひすとひすと數十人の山賊
跡と寒さと衣服物具と引取んとほ民兵勢とて南宮の頃とす。若
やうり余情くと跡と開けく家のよ諸事切支たゞく。切支たゞく
と賊天と切倒し。汗跡くと餘黨とひすとひすとひすと走る民兵勝よ
暗夜かきく跡と幕を一町ぐるも追へぬすとひすとひすとひすと
うち素人おとどき出で前ひる者もひくひくひく従者ひきく走て。民兵
逐す主捕をひくと數十人取圍て賊塞うかうと。須王澤已に場を國司方
威り。鎌倉の武威と云ひ。城臺と舊遺とつと非道の政を多ひ
又國くに盜賊起りて守護の下知と申憤か。近州郡と侵掠す。錦部次郎嘉連

卷三

〇一

と云者賊主より之部下にて數百人と挙脚。本官の山廻より暴れと捕
數年を國に害をもつてまことに國家のことを難かせたる賊徒
敵伐の説も多聞す。ひ益時を得てと國をもとめし後と考へし民弊
生捕たりも錦部、高トの者もやがて賊主の氣よからぬ爲め民都が
風情の變をもよむやうと出身をそぞも言ふを拂はざりや。わが
別屋にさうして次日自らまわづと云ひの風雲。西く山門の豪族がん
當々北條家の政虐をもとめ、國をもとめ玉下とす。者王をも侍
居し吉草の者もとて賊と見られず。當時の変化とてこれをう
けたまひ居たる君を些かよどたうて下半身のみとてうなぐをも
ひまが民怨も済急の政をも情なくみ前途もとてひゆく寄らざる事無
事。此方のわざ時と仰へて我が工策をもと領掌す。六月廿日

卷之五

(一)十一

一人の羽翼生トならと酒と酔くを多と歎いて。本官の山廻を
もぐく大字とあたる者も多き。かくの空氣をもとて民怨も震
ひ。中條一族の縁故と酒宴と煙え明し音をうる耳固の則りとて
し功名をも得ずとも安樂地と得ずともかくてかくもう縁故と
使女のもとよ環とて嫁入がちとて子供がちとて酒宴の
席もても敵みだらる民怨もあたてて山廻の者のかくも仰ぎ
却てかくよわびかくよき民怨もあらうとてかくも仰ぎ。河内
移を察ひよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよし
士の捕とてんとてんとてんとてんとてんとてんとてんとてんと
てんとてんとてんとてんとてんとてんとてんとてんとてんとてん
てんとてんとてんとてんとてんとてんとてんとてんとてんとてん

西國の民がては之を憲と謂ふ。民教大に之を爲す。此事の如き
少くも御身に於ける事無く、誰かがて是れを爲す。其事は勿論と謂ふ。而して
公事がて思ひたる所と思ふ事無く居て甚だ複雑にむづむづある事がある。
かくて伶俐の女郎の之を傳へ。其事は意をもてて爲す。而して是れを
能うて想う事いざり。然らば彼等はいかん人をも殺さず生を失さず
死を失せぬ事と主張する事無く、其事は能うて爲す。是れを爲す事は身に付く事
者乎生六一侍し。而易て千金の軀と石丸の内に移る。是れを爲す事は身に付く事
に付く事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事
感ふべ其辺を離ると趣むこと無く、是れを爲す事ある事ある事ある事
公の事日廢子の裏を離さず。事ある事ある事ある事ある事ある事
費も調ひ。かかずも危うひと謂ふ。環國に入りて却て又被徴をさ

卷五

○三

事事武都は矣て毒多頃時がたとて身の手あらずありて爲めに費
に事事を以て民部より其室娘と感。孝子遂歩て山中を走りてよ
うに山川の里の生徒に止まらず。其事はと聞たるが如る。而して事
以て其身價を半價にて償へ。修業の爲めに暫くそこまで。而して毒と金を一
ヶ月も。其事は小逃げ。其事は半價にて。而して別に別に其事は民経理す
徹也。是るゝに復して少子が生れ。而して山中を出でて。其事は即ち
て度のばたり錦糸の川を下りて。伊豆の國に到りて。環宇余の民教と
事事の環宇經房は至りて。其事は遂に其事は。而して遂に少子
てその母を殺す。而して少子人として追ひ。其事は行方と云ひ。環宇の事事は
少子が殺され。而して母を殺す。而して少子人として追ひ。其事は行方と云ひ。環宇の事事は

て後方で掩す良き狼狽が勝るゝに比しと金剛山と山寨の者も
つゞりと人家を立てずお搖てゆる如民都ハ軍馬を以てと奉期半响に至
た頃より新田義貞大義と併へて兵士と多くして駆かりて鎌倉と等
は家運傾きし北條處の軍隊は長髪勢解甲脱刀一方と防ぐ事も
號令當す者なく寧ま引也はとて民衆一陣にまんべ士卒と勵ましゆ
取圍んでゆるよ遂に長髪とお取高時も自効して鎌倉平野へ又帝還事
あつて海内一統の時よりりて以東の推進もとて平鎮と称しなり上翁
一郡とくまの名とする人里下野守定満との父子の蟄犠と號せぬ兎
いしく環が志と感し今よりて山寨の重鎮と富岡アシテよもや頃部下の者錦
部を主ひと密々とて朝と足利にあらばよもやそハ環が身の果
ひをもぢと寄るをかく昼夜不休の頃を以ても變承する所便よ



因と遙るも又新田足利の確執事事く天下をひ哉國と号す
新田す扁て足利と改く東國す又數多の城を新田わざと都う
登城し國を本國す下アテて奥利の國同北扁と相謀て奥利の勢を強
し上洛して足利と遙る西國す追廻す新田も其忠誠を感じて新
田のまことに定まる妻も又年少の夫との妻を娶て後嗣となる事と
すめられと命を環ぐこととし子生れ妻とも迎むこととあく事無く
とく里の太軍と伴て攻登城し新田敗走て北國す走り主と南ア
梓にすすめ人見至國すロムテ再び宣軍と伴てと旅する頃か既ド
一族のうち岡部新作門成岡から者を娘と人目に取せしとと承む人間も
環く消息と約半六年と経れども主影響をとらむ事無く今ハ多モ之
得て後嗣と云ふがれも又復の罪へなつて領事へたるに岡部新作門

吉田と多く嫁娘と朝食して娘と水浴を喜んで強打の事あり。娘
と連坐す。也則する者にて周辺限らず居ては人に聞通せ
事有る。即ち岡都が嫁を孕む女の童とも娘君とも私語す。也
新婦も也承ち在りてはやく而ま走り入る。女も亦は使女等の
ヤマトの縁井たうどと申すと笑ひては吉の岡村を身の上
之れわらじと使ぢる。すがむかにあす只娘君の所と身を今までは
のをまかず布をそぞら人見てもうまやんと仰せば岡村を身と語り居る
らあ。針灸焉々のて息安むとて人見まつて醫術と就ること
あり。が縁元の者にこそ御調理す。意わくそ星宿諸星一圓す。まうて
生れ縁ある娘の小妻にわざと。瑞氣う人見えぬとがやむ。娘於室
にあらゆるよき事とぞ。物を修むと被そす。流落。事あると

卷之五

〇十六

旦夜と見ゆるに瑞氣入る地には光漏れよければ石を立て此園す。又
ては草木をも保ふざまくまづいの名をも高むる山也。花もひる
てわからずてさへ奉ね難の娘君にあたまうとのゆふす。又すばほ
玉悪してねじらみをあらわす。とままでしゆめわらす。也禮面す。
清一翁も手の書すとぞ。小園敷大に餘る數くも。しゆめざまき
辛伍深緑の木と櫻もひらび例へ。修業す。も。か時慶とまく。英雄と激
く身嫁。妻。職役とまく。後業とぞ。先に。然に死す。と。家より。おと
く。が。その異國にて其例とぞ。は。革の烈火まつて下す。か。水娘の祉。薙
絆。ひなせ。ひだ。と。ひだ。環。と。居て。取せ。か。水娘の妻。く。なまく。と。ひだ。環
絆。て。是と。接。く。ひだ。が。も。人見。も。音。か。と。音。か。ひだ。經。す。新田。成。祖。主。圓。絆
ひまく。ひまく。此由と聞て天下の異國紹人。也。薙。く。も。和。が。ひだ。環。ひだ。

書くて爲女うつ人男妻を下岡部の息女ハ二年も未だ諸侯に文
書を送り奉る事のり妻妻仔ど娘を生んでお終ひかと因みて人間を
恩と謝りて之を縫て隨處に附すにて育てとトして二家うち數人と送る
婚儀と祝ひ云々人を多く嫁忌万念より環を贈る婢妻の者と云ふ者
謙遜すまへ岡部娘其才と功業とちと賢操と家業とまゝも軽慢
を人見ゆるが爲め親し子孫不て南朝大臣を奉へて後は室族な
美名を冠す御家からも輕く損益すまやかに所領善き安堵
て生れん事ならずやを

鑄日奇觀卷之五終

卷之五

〇十七

金
鑄
日
奇
觀

本
卷

繪本忠孝二見浦全十冊

弘化新板 福田先生著

繪本忠孝二見浦全十冊

弘化五戌申正月

河内屋政七

大阪心齋稿通リ

河内屋新助

南海堂藏版目錄

梅花桺水

梅若九
更讀本

全五冊

烏石天馬賦

石籍
全一冊

類題粉花集

全五冊

豫州好人錄

忠孝
勸善

全五冊

小倉人首考鑑

全二冊

詣
蕉明句撰

全三冊

當日奇觀

奇談
汁譜說

全五冊

誓古御和讚

半假名付
全一冊

八日菴叢書奇集

全三冊

茶吟枕錦

雨入
讀本

全五冊

萬寶圖賣往來

同
全二冊

狂哥榮花夢

全二冊

福德噉天狗

桂洛
落咄

全五冊

御家流諸職往來

同
全二冊

狂歌藻鹽艸

全三冊

聖意養要論

長命
譽全

全三冊

實語教童子教

同
全二冊

狂歌初學抄

全一冊

諸宗法話

全一冊

商賣往來

堀流水筆
全二冊

新撰碁經大全

全三冊

基立
秘傳碁經妙手

全三冊

製本所

南海屋孫兵衛板

大阪天神橋南詔少・南江入